

あいさつ

東京都教育委員会 教育長 大原 正行

小学校において、子供たちがさまざまな生き物に触れ、感じ、考えながら、生き物を愛護し、生命の尊さを実感する教育の推進を目的に、東京都獣医師会が平成十三年度から「学校動物飼育モデル校事業作文コンクール」を実施されていることに對し、心より敬意と感謝の意を表します。

さて、物質的に豊かな時代を迎えましたが、親や教師以外の地域の大人や異年齢の子供たちとの交流の場や自然体験等の体験活動などの減少を背景に、生命尊重の心や自尊感情が乏しいこと、人間関係を築く力や集団活動を通じた社会性の育成が不十分であることなど、子供たちの育ちに對する課題が指摘されています。

そのため、学校においては、自然や動植物を愛し大切にすることを育てる自然体験活動、集団生活の在り方などについて望ましい体験を積む集団宿泊活動など、学校教育活動全体を通じて様々な豊かな体験を子供たちにさせることが求められています。

とりわけ、学校で動物を飼育し、生命と触れ合いかわり合う体験活動を充実させていくことは、都内の子供たちにとってきわめて大切なことだと考えます。児童自らが継続的に動物を飼育していくことで、動物が生命をもつて生きていることや成長していることに気付くとともに、動物を大切にしようとする気持ちや態度がはぐくまれます。また、仲間と協力して共に飼育することの必要性も実感することができます。このように動物を飼育することは、生命を尊重する態度や思いやりの心、責任感や社会性など豊かな人間性をはぐくむことに大いに役立ちます。

今年度の作文を読むと、学校動物飼育モデル校での動物飼育の活動が、子供たちの心の成長に大変よい影響を与えていることが分かります。例えば、動物の飼育を通して、動物への愛着を深め、さらに進んで飼育をするようになった子供の姿や、世話をしていた動物の死に直面して命の尊さについて改めて考えるようになった子供の姿などが書かれていました。また、子供たちの動物の飼育に對するメッセージには、思いやりの心や感謝する心、責任感、将来への夢などが着実にはぐくまれていることがひしひしと伝わってきました。

各学校におかれましては、引き続き動物と触れ合いかわり合う体験活動に継続して取り組むことを通して、豊かな人間性をより一層はぐくんでいただくとともに、その成果が各地域に広がり、学校における動物飼育の活動の更なる活性化と充実につながることを心より期待しております。今後とも本事業の益々の充実と発展を祈念しております。

ご挨拶

社団法人東京都獣医師会 会長 村中志朗

平成21年度（社）東京都獣医師会学校飼育動物モデル校事業（作文コンクール）の開催にあたり、ご挨拶申し上げます。

このたびの作文コンクールに際し、12校から、数多くの作文をお寄せいただき、関係者各位のご理解・ご協力に對し、心より御礼申し上げます。次第であります。

東京都獣医師会では「学校飼育動物活動事業要綱」を策定し、学校で飼育される動物に関する様々

な事業展開をいたしております。その要綱の目的には次のことが謳っております。

『本事業は、獣医師としての専門的な立場から子どもたちへの情操教育や科学教育、および動物愛護精神の育成を支援し、人獣共通感染症に対する予防および啓発活動を行うことにより、子どもたちの健全育成に寄与することを目的とする』

学力偏重の世の中において、ともすれば命の教育が軽視されがちとなり、また都会の住宅事情なども相まって、子供たちが動物と触れ合う機会が少なくなっていることは否めません。私も学校教育を受ける立場にはありませんが、社会全体からすれば、一人の大人として、また子を持つ親として何をなすべきかを考え、獣医師としての立場でこの要綱の目的といたしております。

本作文コンクールを始めて、はや10年になりますが、年ごとに新鮮な感慨をもって作品を拝読させていただいております。

新しくモデル校として参加される学校と何年も継続して参加されている学校の作品では動物との触れ合いの表現に幾分格差があるように感じます。

勿論、学年差という点において文章力の違いはあつて然りですが、言葉の通じない動物たちを如何様に捉えるかの感性は触れ合う時間の長さ大きく関わっているように思います。実際に、いくつかの作品の中で、動物との関わりofのステージが時系列で書かれているものがありますが、最初のころと何カ月か経たあとでは、思い入れの深さだけでなく確実に情が深まってゆくのを読み取れます。殊に、「死」と直面した際における児童たちの心の機微は、「痛み」と「慈しみ」という感情が織り交ざって読み手に伝わってきます。

核家族化の中で、身近な存在の死を目の当たりにできない子供たちにとって、初めてのセンサーショナルな体験は、これからの成長の中で「生き物への優しさ」「人への優しさ」という形に変わってゆくものと確信しております。

ゲームの中で安易に命がリセットされることに夢中になる今の子供たちに少なからず危惧の念を抱いておりますが、今回の多くの作品の中からは、命は無機質なものではなく温もりがあるものとして、児童たちの五感に浸透していることを感じさせてもらい、安堵いたしました。教育現場におられる教員の方々のご尽力にあらためて敬意を表する次第であります。

子ども手当給付に収入の格差を持ちこまなかった新政権民主党の考えは、鳩山首相の会見にみられる「社会の子供」という言葉に集約されているように思われます。収入の格差と手当の是々非々は別として、子供は社会全体のもの、という言葉は決して詭弁ではなく、われわれ大人たちが心に深く刻まなければならないことでもあります。

命の教育という現場において、親・教師・獣医師、それぞれ立場は相異なりますが、それぞれがそれぞれの立場で責務を全うすることが、子供を取り巻く社会の一員として最も重要かと思われま

す。
社団法人東京都獣医師会は今後も学校飼育動物活動事業要綱の目的を遵守し、専門家としての責務を全うする所存であります。

末尾となりますが、本作文コンクールを実施するにあたり、昨年に引き続き多大なるご協力を賜りましたアニコム損害保険会社さま、応募作品の審査にあられた諸先生方に深謝いたします。

平成二十一年度動物飼育作文コンクール審査会

審査委員長

宮下 英雄 聖徳大学大学院教職研究科教授

同委員

日置 光久 文部科学省初等中等教育局視学官

新谷 珠恵 社団法人 東京都小学校PTA協議会 会長

和田 栄治 東京都教育庁指導部 義務教育特別支援教育指導課指導主事

村中 志朗 社団法人東京都獣医師会会長

東京都学校動物飼育モデル校一覧

大田区立赤松小学校

中野区立鷺宮小学校

豊島区立長崎小学校

八王子市恩方第二小学校

立川市第八小学校

府中市立新町小学校

町田市立南第四小学校

町田市立大戸小学校

小平市立第十五小学校

小平市立鈴木小学校

西東京市立保谷第二小学校

西東京市立柳沢小学校

学校奨励賞

大田区立赤松小学校

小平市立第十五小学校

総評

審査委員長 宮下 英雄

今年度も多くの学校から、すばらしい作文をたくさん応募してくださいました。回を積み重ねるごとに応募される学校が多くなってきました。また、作文の内容が、読み手に新たな感動を与えてくれます。このことは、動物を通して、様々なことを学んできている証拠だと感じ、とても嬉しくなります。その応募作文の中から、皆さんは、優秀な作文として選ばれ、それぞれの栄えある賞をいただきました。まことにおめでとございます。また、この受賞に至るまでに、ご指導、ご助言をくださいました各学校の校長先生をはじめ多くの先生方、そして、ご支援、ご協力くださいま

した保護者の皆様方に感謝を申し上げます。ありがとうございます。

さて、皆さんは、学校での動物飼育体験を通して、自分で思ったこと、自分で感じたこと、自分で考えたことなどを、自分の言葉で、しっかりとした文章や詩に書き表してくださいました。受賞されました皆さんは、一年生から六年生までおります。文章の表現は、当然ながら学年によって異なり、特色がありますが、どの作文も、動物の気持ちになって一生懸命世話をしたときの様子が、手に取るように分かりやすく書かれています。また、その世話を続ける中に、皆さんの優しい心がにじみ出ています。それは、動物飼育に直接かかわった人だけが感じることでできる行動を伴った優しさと言えます。

皆さんのどんなところにその優しさににじみ出ていたのか、また、飼育活動を通して皆さんは何を学んでこられたのか、皆さんの作文からまとめてみました。

一つは、動物を良く見て、動物の気持ちになって世話をしているということです。この良く見ているというのは、動物を単に眺めているということではありません。動物の体の調子を観察しているということです。ウサギやニワトリさんの動きや歩き方、鳴き声、えさの食べ方と食べた量、糞やおしっこなどについて細かく観察し、記録しながら、動物の体の調子、健康に合わせた世話の仕方を考えています。飼育の基礎基本は、相手を思いやる、優しい気づかいの心で世話することが大切だということを学んでいます。

二つ目は、継続して世話をしてきたという努力の積み重ねに見られる自信を伴った優しさです。自分が当番のとき、寒い日や雨の日、自分が疲れているときなどがあつたでしょう。そんなときでも、世話を続けてきました。優しさには、どんなことにも負けない強い心が必要です。飼育には、継続するという強い心（精神力、忍耐力、勇氣）が大切だということを学んでいます。

三つ目は、動物は、人間のように言葉で話をすることができません。しかし、皆さんは、動物の鳴き声やしぐさなどから、動物と会話をし、動物の気持ちを分かろうとしています。そのような動物とのかかわりを通して、皆さんは、動物だけでなく、周りのお友達など、自分ではない相手の気持ちを理解して、その気持ちを大切にしておかわるこの大切さを学んでいます。

四つ目は、生きている動物の命には、限りがあります。一生懸命世話をしても、悲しい出来事に出会うことがあります。そんな時、専門家である獣医師の先生方からご指導をいただき、動物を救うことができました。また、飼育の方法などについても専門的な知識を学ぶことができました。正しい飼育の方法と動物の特性を学びながら世話することの大切さを学びました。

五つ目は、皆さんが書かれた作文そのものについてです。非常に、表現が豊かで、文章の構成がとても上手です。なぜ、こんなに上手なのかと考えたとき、学校の先生方のご指導はもちろんですが、皆さんが、真剣に動物とかわりあい、様々な感動的な体験をたくさんしてきたことにあるからです。その感動体験が、言葉を選び、文章を練り上げ、読み手にも感動を伝えることのできる豊かな文章表現となっています。

以上五点について優しさとその学びについて、感じたことをまとめてみました。そのほかにも沢山の優しさや学びを見出すことができますが、皆さんで読みとっていただきたいと考えます。

最後になりますが、この作文集を読み合うことによって、いろいろな学校のお友達が、動物飼育を通して、何を学んでいるのかを知り、これからの動物の世話や自分の生き方に役立てていただきたいと思えます。

東京都教育委員会賞

『かわいいそうなイエロー』

西東京市立保谷第二小学校 四年 男子

ぼくは、イエローがなくなる前日にし育をしていました。それでその前日にし育をしている時、イエローは、いつもだったらパクパクエサを食べているのに、全く食べなかつたのでたべさせようとしたけれどダメでした。

し育が終わった後イエローを見たら、ぐったりしていたので、みんなに「ぐったりしてない。」と言ったら、「ねむそうだからそっとしてあげよ。」と言って、そのままにしてしまいました。そのよく日になって、朝遊んで、教室に帰ろうとしたら、だれかが「イエローが死んだよ。」と言っていてぼくはダッシュで、イエローの所に行くと、イエローがたおれていました。そして先生が来ました。その後、し育当番の子全員でイエローをダンボールの中に入れて持っていきました。それでぼくは運んでいるとき、ちよつとなみだをだしてしまいました。ぼくは、イエローの体をさわってみると、いつもよりへんな感じで、死んでしまうつてこういうことなんだなあと思いました。その時は死んでしまったのは、ぼくのせいかなあと思って、とても悲しかったです。ぼくはその後、死んでしまった事の、反省をしました。エサの葉っぱが悪かつたのかな、などいろいろ考えました。その日のし育の時、つまのブラッドが、イエローをさがしていました。それを見て、「ブラッドかわいいそうだなあ。」と友だちと話していました。それが何日も、続きました。その数日後には獣医師の先生がイエローは「がん。」だったことを知らせてくれました。

そしてある日、新しいオンドリが来ました。オンドリの名前は、バロンに決まりました。それからブラッドは、バロンといっしょの部屋でくらすことになりブラッドは、口ではしゃべれないけれど、うれしそうにしていました。それでも、イエローの死んでしまったことは、わすれられません。イエローに手紙を書いた時は、イエローにとどいているかなあとか、イエローにまた会いたいなあと思っていました。イエローには天国でも元気にしてほしいです。イエローとは、たくさん思い出があります。それは初めてし育した時には、一番きれいな羽で、かっこいいし、鳴き声もかわいかつたこととブラッドがたまごを生む時、イエローが守っていたのがとてもかっこよくて、勇かな鳥だなあと思つたことです。

ぼくは、心でおはかまいりをしています。今は、イエローはいないけれどバロンがとてもかわいいです。そして、イエローとすごしていた時は楽しかつたなあと思ひ出します。

(講評) イエローがなくなつて、体^なをさわつたとき、いつもより変な感じがしました。それは、元気がなくなつたときも、亡くなつてしまつたときも、いつも深い愛情をもつて接していたからですね。そして、なくなつてしまつた後も、イエローのことを思つて手紙を書きました。そのやさしい気持ちに感動しました。死ぬことはとても悲しいけれど、イエローは、こんなにかわいがられて幸せでしたね。これからも、動物たちをかわいがつていってください。

(和田栄治)

東京都獣医師会長賞

『モック大好き』

大田区立赤松小学校 二年 女子

わたしは、一年生のときにずっとモックのお世話をしていました。モックは、にんじんがすきでとってもかわいいです。わたしがだっこするとキューキューとなきます。

モックの大きいなのは、ぬれることです。

風のつよい日やさむいときは、かごの中にテントをつけてあげました。

モックの色は、白と黒と茶色です、

もうおじいちゃんだからやさしくあそんであげました。

モックのお気に入りのところは、ジャングルジムです。

ジャングルジムの上には、のぼれないけど、めいろがすきです。

モックは、足がおそいです。

ちよつとだけ太っています。けどどうんどうは、とくいです。

さかだちとぶらさがるのが、とくいです。いやがってるようすは、ありません。

だっこすると、きもちよさそうに手にねっころがります。

くびに手でさわると、わらっているようにします。

なき声は、キューとミーとキーってなきます。

なき声は、とってもかわいいです。

でも、もうモックは、いません。二学期にしないでしまいました。それを聞いたら、むねがキューとしました。

天国で元気でいてくれたらいいなと思います。

ずっとモックのことは、わすれません。

(講評) 井上さんが、モックをとてもかわいいと思い、モックのいやなこと好きなことを一緒に発見して、庇ったり遊んだり、ともに楽しく過ごしたことがよくわかります。その上で、「もうモックはいません」「二学期にしないでしまいました」という言葉で私たちも胸がハッとしました。「ずっとわすれません」との言葉で、悲しみの深さが伝わりました。全員が感動しました。(村中志朗)

審査委員長賞

『マロンのダイエット』

町田市立大戸小学校 六年 男子

ぼくの学校には、マロンとミミというウサギがいる。最近、そのマロンのダイエット作戦が始まった。それは、マロンがあまりにも太っているので、六年生が中心になってダイエットをしよう、ということになったのだ。

まず始めに、マロンとミミはどんなことをして過ごしているか、行動観察をした。ぼくはミミの観察をすることになった。

ミミは、日かげの所でじっとしていた。ちよつと動いただけで時間が過ぎてしまった。マロンも同じでほんの少し動いただけだった。ウサギは夜行性だからかな、とぼくは思った。

それから、マロンの太った原因をクラスのみんなで考えた。原因は3つあった。それは、①鶏のエサやミミのエサまで食べてしまう。②じっとして動かない、運動不足。③かわいがりすぎてついエサを多くあげてしまう。というものだった。

この3つを解決していかなければならない。そのために、ウサギについてもっと詳しく調べることになった。本で調べてみると、ウサギの生態や、ウサギが太るとダイエットは大変なことが分かった。他にもあげてよい物やいけない物、ダイエットにより物などたくさんのが分かった。

一週間ぐらいして、いつも大戸の動物をみてくれるじゅう医の林先生に来てもらって、調べても分からなかったことを聞いた。一つはマロンは何キロまでやせたらいいのかということだ。林先生は、

「マロンの種類だったら、標準体重は、二・五キロぐらいです。」

と言った。ぼくは、びっくりした。マロンは、三・五キロだ。これから一キロもダイエットしなければいけないんだ・・・と。

もう一つおどろく事があった。このままの体重だとどのくらい生きられるか、という質問に林先生は、

「このままだと、一年くらいで何らかの症状が出て、一年半くらいで死んでしまうでしょう。」
と言った。ぼくは、また、びっくりしてしまった。マロンが一年半くらいで死んでしまうなんて・・・。
早くダイエットしなければいけない、と強く思った。

その後、みんなでダイエット方法を話し合った。そして、①ラビットフードをあげない。②野菜・草・チモシーだけあげる。③チャボのエサを食べないように、エサは床に置かない。という3つの方法を考えた。林先生も、

「この方法でいいでしょう。」
と言ってくれた。さらに、

「一キロ以上も太っている場合は、決して無理に走らせてはいけません。」
とお話されたので、やせたらマロン専用のスペースを作って運動をさせるつもりだ。

今、各班ごとに交代で、毎日体重を量ってマロンの体重をグラフに記入している。グラフは上がったりがったりだけど、少しずつ体重はへってきて、今は三・四キロまでになった。マロンには頑張ってもっとやせてほしいと思う。卒業までにどこまでやせられるか、ぼく達も、これからもがんばっていききたい。

(講評)小川さんは、大好きなウサギのマロンがあまりにも太っているのです、ダイエット作戦を始めました。マロンが太ってしまった原因を、クラスみんなで考えました。そして、行動観察をしたり、図鑑や本で調べたりして、ダイエット方法をみんなで話し合ったのです。マロンへの深い愛情を背景として、科学的に対策を考えようとしている点が、とてもすばらしいと思います。(日置光久)

審査委員長賞

『動物飼育』

ぼくは、一、二年生のころ休み時間に四年生がいっしょうけんめいに動物飼育活動をしている姿をよく見ていました。そのときに、

「どんな気持ちでやっているのかな。」ととてもつらいのかな。」と思っていました。そして、「四年生になったら、ぼくもあんなにできるのかな。」と不安になっているうちに、四年生になっていました。

最初の飼育活動は不安だったけど、五年生が手伝いに来てくれました。そのとき、ぼくはとても動物がこわくて、うさぎもチャボもさわることができませんでした。こわがっているボクの姿を見て、友達が、チャボを持って追いかけてきたりすると、ぼくはさけびながらにげまわっていました。そんな姿を見て五年生がうさぎの持ち方を教えてくれました。うさぎはふわふわでも温かかったです。

家に帰って、その日のことをお母さんに話すと「うさぎたちは、いつもエサや水をほしがっているよ。」と、教えてくれました。ぼくも、おなかがすいたり、のどがかわいたりすると、あまり力が出てきません。動物たちも同じなんだなと思いました。

次の日飼育当番になった時、勇気を出して、こわがらずに、すのこを取り出してそうじをして、エサや水をあげ、とてもがんばりました。そうすると、うさぎたちはとても喜んでえさを食べていました。ぼくは、「うさぎは話すことができないから、大変だな。ぼくがしっかりと世話をしないといけないな。」と思いました。

そんなある日、事件がおきました。飼育活動のときに、ぼくがえさや水を用意していると、遠くでチャボがいつもとちがう様子で鳴いていました。カラスが木の上からメスのチャボをねらっています。オスはメスを守ろうと、体の羽をふるいたせていました。ぼくはチャボを助けなければいけないと思いました。でも、思うとおりに体が動かなくなりました。そのとき、カラスがチャボがけて飛びかかり、とてもピンチになりました。その時に先生が来てくれて、カラスを追いはらい、チャボを助けてくれました。それを見たぼくは、本当は、飼育活動をしているぼくが助けなくてはいけないんだと思い、反省しました。

ぼくは来年、ぼくたちの後を引きついで飼育活動をする三年生に伝えたいことがあります。つねに動物の様子をチェックして、エサや水をあげてください。そうじもしてください。エサや水がないとぼくたちと同じようにおなかがすきます。そうじをしないと、ぼくたちと同じように病気になるってしまいます。死なないように大切に育ててください。ぼくのように、動物が苦手でこわいと思っている人も中にはいると思います。でも最初はこわくても、お世話をしていくうちにどんどんかわいくなり、飼育が楽しくなります。ぼくは、三年生には動物の命を大切にしなければいけないということを伝えていきます。

一年間、この活動をやってきて、動物を大切にしようと思ってきました。これからもずっと動物にやさしく、大切に育てていきたいと思ってきました。

（講評） 多くの人たちとの関わりがうかがえます。カラスからチャボを守る責任感を強くした様子も、臨場感溢れる場面で描いてくれました。自分は人間として何ができるかという視点を持つレベルまで意識を高めていく芽を感じました。実際、1、2年生と比べ、自己の成長を実感していますね。飼育活動という仕事を通して、人間が世話、仕事することの大切さ、動物から気づかされたことなど、多くの気づきを得ていく姿が、今後の更なる大きな成長を予感させます。

（新谷珠恵）

審査委員賞

『学校のうさぎとニワトリ』

西東京市立柳沢小学校 三年 男子

ぼくの学校では、三年生になるとうさぎとニワトリのしゅうをします。うだぎは、ピッピとコアがあります。ニワトリは、レナとグレートとチョンがいました。

二年生の時は、どんな風にしゅうをやるのかわからなかったけれど、去年の三年生にそうじのしかたや水やりやカギのある場所をおしえてもらって、くわしいことがわかりました。

うさぎのお世話では、トイレのそうじをがんばっています。ケースにこびりついたうんちを、たわしでしゅうかりとるのがたいへんです。うんちやおしっこがついた新聞紙をゴミ箱にする時、足におしっこがかかってしまったこともあります。

うさぎのコアは、とても足がはやいです。エサをあげようとしてもすぐに走るのです、だっこをしてからあげます。ぎやくにピッピは、とってもおとなしいので、そうじがやりやすいです。だっこをしてもにげないのでおちついてふれあうことができます。

ぼくは、コアの方が好きです。理由は、体がきれいなコアのような茶色で、さわるとふわふわして、毛がなめらかだからです。

ニワトリのグレートは、足の後ろがわのつめがぐにやぐにやして、めずらしいなと思いました。赤いかんむりのようなとさかをさわってみたら、ハムみたいな手さわりで、ちよつと気持ち悪かったです。エサを手ですくってあげたら、すごいきおいでついたので、エサがボロボロこぼれてしまいびっくりしました。きつと、すぐおながすいていたのだと思いました。その後ゆかに落ちたエサをまたひろわないといけないので、たいへんでした。

ニワトリのレナは、にげ足がはやくてだっこがなかなか出来ません。やつとつかまえてだっこした時、おなががプヨプヨして気持ちよかったです。いつもたまごをうむのは、メスのレナです。レナの体は、クリーム色をしています。オスのグレートとちがいで、とさかがなくて小さいです。ニワトリのチョンが、まだ生きているときはグレートにつつかれて首の毛がはげて痛そうでした。首wつつかれてもやりかえさないから、チョンはがまん強いなと思いました。

夏休みが終わってから、野村動物病院の先生に聞いて、チョンがガンになって死んでしまったことを知り、おどろきました。それに、九十こもおなかにガンがあったそうで、かわいそうでした。病院につれて行かれた時も、いたかったのだろうと思いましたが、野村先生の話を聞いてガンは人間だけではなく動物もなることをはじめて知りました。ぼうたちの目では、ガンの様子が見えないのに野村先生にはどうして見えるのかふしぎでした。

しゅう活動をして感じたことは、動物は見ていただけだとかわいいけど、お世話するのはたいへんだということです。きつと動物園のしゅう係の人も、もつとたいへんなだろうな、と思いました。これからも学校の動物たちがけんこうで長生き出来るように大切に育てていきたいです。

(講評) 上山さんは、2匹のうさぎと3匹のニワトリの飼育をしています。トイレの掃除や餌をあげるときの動物たちの仕草や動きを、詳しく観察しています。また、だっこしたときの感触を、子どもらしい表現で書いています。本当に学校の動物たちが好きで、一緒に生活しているうれしさが伝わってきます。飼育活動を行う中で、動物園の飼育係の人への共感も芽生えました。(日置光久)

審査員特別賞

『一年間の飼育係』

小平市立小平第十五小学校 四年 女子

私は、動物飼育をやるのをとても楽しみにしていました。なぜかというと、私のお兄ちゃんは、五年生になり飼育委員会をやるうと思ったら飼育がその年から四年生の仕事になってしまって、全然できなくてがっかりしていたので、私は、四年生になったらお兄ちゃんの分までがんばろうと思っただけです。

でも実は、こまったことがあります。動物アレルギーなので、体がかゆくなったり、鼻がムズムズしたりするのです。それでも私は、動物が大好きでいつも飼育小屋を見ていたので、ぜったいがんばろうと思いました。

今の五年生には、そうじの仕方やエサやりを教えてもらいました。すごくしつかりやっていたので、私にできるか心配でした。それから、じゅう医さんには、うさぎやにわとりのことを教えてもらいました。知らないことがいっぱいあつて勉強になりました。だから今はとても感しゃしています。

三年生の時、一回だけ飼育をやっているところを見ました。むずかしそうでした。けれどみんないきいき楽しそうにやっていました。その時、私もあんなふうに友達と協力してお世話ができた方がいいなと思いました。そのゆめがかなった時は、すごくうれしかったです。

四年生になって、最初の飼育係の日がやって来ました。そうじの時間に先生とはんの人といっしょにしました。最初なので何をやっていいかわけが分からなかったのですが、かぎを開けたり野菜を運んだりしている友達もいて、私も何かしなくちゃと思いました。そこで、うさぎ小屋の中にいてある板を外へ運んで、そうじを始めました。その時に、うさぎ小屋の下へ毛がいつぱい落ちていくしゃみが出てしまいました。それでもがんばってきれいにしたら、とても気持ちが悪くなりました。みんなむ中になって働いたので、教室へもどるのがおくらしてしまふほどでした。次は、おくらないように、テキパキやるうと思ひました。

夏休みの当番の日、九時に間に合うように家を出ました。他の友達も来るかどうか少し不安でした。校門で会った時はほっとしてやる気が出ました。もうやり方は分かっていたので、はりきって働きました。にわとりの水をかえる時、入れ物を持って行くうとしたら、チャボに右手をつつかれて思わすきけんでしまいました。チャボは、羽をバタバタさせていました。きつと水を取られるのだと思つたのでしよう。いたかつたけれどきれいな水に取りかえてあげました。だんだんちゃんどできるうになつて来て、自信がつきました。夏休みは、もう一回、当番をしました。何をしたらいいかよく分かるうになりました。

九月の休みの日、仲良しの友達とお母さんといっしょに当番をやりました。チャボとチャツピーを外に出してそうじをしました。お母さんは、初めてだったので私がそうだつたようにわけがわからないようでした。私が仕事をしているのを見て、すごいねと感心していました。友達は、うさぎのフローラやフラットに声をかけていました。

飼育の仕事も残り四ヶ月です。最後まで気をぬかないでがんばりたいと思ひます。私が飼育をし

ている間、動物達が元気でいてくれてとても幸せでした。板を運ぶのは、重くて大変でしたがやりがいがありました。うさぎやにわとりや金魚のことがますますかわいく思えるようになりました。これからもっと声をかけてあげたいと思います。

私が大切だと思ったことは、動物を大事にする気持ちと協力してお世話をする事です。そして、私たちが五年生から教えてもらったことを今度は三年生に伝えて動物達のお世話をがんばってもらえるようにして行きたいです。

(講評) 動物アレルギーなのに、興味をもって頑張りましたね。方法がわからない時から、お友達をみて、「なにかしなくっちゃ」と仕事を見つけて行ったところ、そして、大変だからこそやりがいがあるとの考えには感心しました。お友達のお母さんが「すごいね」って言ってくれる筈です。また、飼育とは「動物を大事にする気持ちと友との協力」と下級生に伝えたいとのこと。荒井さんの、体験から真理を見つけた自信と誇りを感じます。(宮下英雄)

『ヤギの飼育が好きになった理由』

立川市立第八小学校 五年 女子

私は最初、ヤギの世話をするのがきらいだった。

五年になって、すぐ、ヤギ当番がまわってきた。私はいやだなと思いつつ、やった。

フンがいっぱいで集めても、ヤギがすぐにするので大変だったし、友達がしゃべってやる気がおこらなかった。

一学期のある日先生がヤギに子供を産ませるか聞いてきた。多数決で産ませることになった。それで、農工大の人が、ヤギを連れて帰った。未来はにんしんできなかったのだからヤギが小に来てだんだんお腹がふくらんできた。一学期の六月に農工大の人がきてお腹の中をエコーで見せてもらった。中には、2匹の小さい子ヤギがいて私がかわいいと思った。こんなに小さいけど、ちゃんと命があるから、無事に生まれてきてほしいなと思った。

二学期の九月に子ヤギが生まれたと聞き、私と友達で見にいった。

そこには子ヤギが二匹生まれていて、一匹は元気だったけどもう一匹の方はいまにも死にそうな状態で副校長先生がタオルでふいていて、私は副校長先生が一つの命を救おうと一生懸命がんばっていて私はすごいと思った。そのおかげでヤギは立つことができ、元気になった。

次の日、子ヤギを見ようと人が集まっていた。私と友達も見ようと思ったけど人がいたので、なかなか見えなかった。でも見たかったので次の日も、また次の日も見にいった。やつのことで見えた。とてもかわいく、一匹の子ヤギはねてて、もう一匹の子ヤギはお乳を飲んでた。私は、最初ヤギの飼育がきらいだったけどはやくやりたくて待ち遠しくてたまらない気持ちだった。

そんなある日、先生が連休にヤギ当番をやってくれないかと言ひ私は友達と日を合わせて、手を挙げた。

ヤギ当番の日が来て、友達と待ち合わせた場所に着き、来るのを待った。友達が来て学校に行つた。まずそうじをして、エサをあげた。子ヤギをさわるうとしたがお母さんヤギがとっしんしてきそうなのでやめといた。水を取りかえてヤギ当番を終わりにした。私はお母さんヤギが子ヤギを守ろうとしている様子を見て、感激した。

そして、十月に班でやるヤギ当番がまわってきた。私はまたできるんだと喜んだ。

そうじの時に行き、そうじやエサや水をやった。その後、友達が子ヤギにさわっていたので私もさわってみた。その後、子ヤギがお乳かとかんちがいし、指をなめた。すごくすぐったかった。私はヤギ当番がきらいだったけど今はすごくやりたくてしかたがなかった。子ヤギが産まれただけでやりたい気持ちになるなんて想像もしなかった。だから、みんなで子ヤギを育てていって大きくなってほしいなと思った。

(講評) 講評

はじめは、ヤギの世話当番がいやだったけれど、生まれた子ヤギを見て、当番がやりたくなりました。ヤギと接つると、ますます、愛いとしくなり、当番が楽しくなりました。また、副校長先生やお母さんヤギの行動にも感動しました。飼育を通して成長した自分を感じられましたね。これからも、このような、すばらしい動物飼育を続けていってください。(和田栄治)

『花子と二郎』

八王子市立恩方第二小学校 四年 藤原 宗谷

ぼくがヤギを観察しに小屋へ行くと花子と二郎は高い場所にある板に乗っていました。また、二匹と一緒にじゃれ合っている所を見ました。ぼくはけっこんしてしまいそうだと思ってびっくりしました。

ぼくは花子と二郎に野菜の皮をあげました。すると、ちゃんとおいしそうに食べてくれました。ぼくは嬉しかったです。ほかにツバキの葉っぱも食べてくれました。ぼくはその時、花子と二郎が

「もつとちようだい！」

と言っているような気がしました。ぼくは花子と二郎が、ぼくに話しかけている気がして、

「気持ちが悪くて不思議だな」と感じました。

そして、よく二匹を観察してみたら、ヤギの黒目が長方形になっていました。人間とちがう見え方がしているのかなと思いました。

次に、小屋の中を見回してみると小さなふんがたくさんころがっていました。ぼくは、「なんでヤギのふんはこんなに小さいのだろう。」

と思いました。理由は野菜ばかり食べているからかなと思いました。

また、二郎の首をよく見たら何かが二つぶらさがっていました。一番最初に見た時は、「なんでこんな物がぶらさがっているのだろう。」

と思いました。ぼくは学校の人たちに聞いてみた所、ぼんぼんと言っていました。ぼくはなんでぼんぼんと呼ぶのだろうと思いました。ぼくはのどの一部が脂肪になってぶらさがっているんじゃないかなと思います。

そして、顔をよく観察してみると、ヤギの鼻がとんがっていることに気がつききました。キツネみたいにとんがっていました。でもよく鼻を動かしていたので人間よりは鼻がけっこう強いのかなと思いました。

そして、花子を見たら角がすごく長く生えていました。二郎はまだ、全然角が生えていませんでした。そして花子その大きな角でおりにとっ進して来ました。そしたらおりが（ガンゴーン）とすごい音をたてました。ぼくは、花子が二郎を守っているように思えてきました。花子も人間と同じように子どもを大切にしているんだなと思いました。ぼくは花子が、

「わたしの子どもに手を出さないで！」

と言っているのかなと思いました。

ぼくは花子と二郎に長生きしてもらいたいなと思いました。そして恩二小のみんなをもっと楽しませてほしいと思います。

（講評）藤原君は、ヤギの親子を世話していて、見れば見るほど疑問がわいて、そのたびに藤原君の頭がクルクルと動いているのがよくわかり、読んでいて楽しかったです。また花子の角の大きさに驚き、ゴーンと突進しているのに、ひるまずにその理由を考え、「母が子を守ってる」と感じたことで、藤原君の冷静さと優しさが伝わりました。読んでいて、情景が目の前に浮かぶ作文です。

（村中志朗）

『動物は感情を持たせてくれる』

豊島区立長崎小学校 六年 齋藤 博朗

僕は、モルモットと接して色々な感情がわきました。

まず、そうじの時です。いつもなら昼休みが終わってそうじをするとなると

「だるいなあ、やりたくないなあ。」

と思います。でも、モルモットの当番になると昼休みが終わっても

「よしやるぞ。」

という気になります。

時々、時間ができると僕はモルモットと遊びます。モルモットに触ったり遊んだりします。その時、モルモットが僕から逃げる時があります。その時は少し悲しくなりますが、反対にモルモットの方からなついてくると、嬉しい気持ち心が心の中でいっぱいになります。遊んでいるときに時々、モルモットがおもしろい動作や可愛い動作をします。例えば足が、わらに引つかかり動けない時にジャンプをする所がとてもおもしろいです。他にも後足で耳をかくくぐさはすごく可愛いなと思います。また、寝ている時も目をつぶっている所が小さく動いて、見ているこっちまで眠くなってしまう。そんなモルモットを見てみると、とても心が和んでいくのがわかります。

僕は昔、鳥とうさぎを飼っていました。昔飼っていたそのうさぎと鳥は、今書いてきたモルモットのように可愛い動作をしたりしていました。例えば、うさぎの鼻がピクピク動いたり、その鳥が水浴びをする時に背中の方から入ったり、あくびをする時にのびーとするのでは無く、すごくあくびの時間が短いのでとても可愛らしいなあと思いました。

僕は動物と触れ合う事によって色々な感情を持てるし、心が和んだり自分の素直な感情が出るからとてもおもしろいし、たのしいなあと思いました。僕はそんな気持ちにさせてくれる動物の力はすごいと感じました。どんな落ち込んでいても、動物を見れば心が明るくなると思いました。あと、どんなに小さな動物でも要らない命なんて無いんだぞ、という気持ちが強くなりました。

（講評）題名にもあるように、動物は人の心を育ててくれる存在、一方的に人間が動物を育てるだけ

ではないとの気づきが表れています。斎藤さんは、動物に触れ合うことで、自分が素直になれるのでしょうか。人間ではなく、動物から力を得た感動と命の大切さを感じたことが、最後の一行に集約されています。動物は、人間の玩具ではなく、人間の心を支え、命の力と存在を実感させる。人間は助けられているのだという、力強くも謙虚な思いが伝わってきます。

(新谷珠恵)

『飼育当番』

中野区立鷺宮小学校 四年 齋藤 龍

ぼくが飼育当番をやっている時の気もちは色々です。飼育当番をやっていて、ウサギにかみつかれた時は、「きらわれているのかな。」と思ったり、ぜんぜんかみつけれない時は「好かれてるのかな。」と思ったりします。そしてチャボの時は、キングにつつかれたら、「きらわれた。」と思って悲しいです。

ぼくがまだ三年のころに、ぜんぜんチャボやウサギがまだ好きでない時は、はっきりいっていやでした。たまにサボってしまう時もありました。だけどある日、飼育当番に行つて初めてウサギをだつてきた時はうれしかったです。それから毎日行くようにしています。

チャボは全然ダメでした。チャボが近くに來たら走つて逃げてしまいました。でもチャボのメスがだつてきた時はうれしかったです。そして一ぴきのメス、次はオスのサファイヤもがんばって近づいてだつてきました。次はオスのもう一ぴきのキングもだつてきたくて、そうしたら、こうげきしてきて、キズができる時もありました。でもめげずに続けているとだんだんなれてきて、こわがらずに近づけるようになりました。そしてとうとうだつてくるようになりました。その時はものすごくうれしかったです。

つい最近雨の日に行つてみるとブルブルふるえていたのでだつてあたためました。そしてあばれんぼうのキングをその日だけは全然こうげきしてきませんでした。そしてだいてあげると、コッコとかわいらしい声で鳴きました。ぼくはどんだんどんかわいく思ってきました。サファイヤのこともだつてあげたらサファイヤもキングみたいなかわいらしい声で鳴きました。それでチャボに会うのが楽しみになりました。

飼育当番をしていて感動したことは、キングがいらだつていて、ぼくが近づいたらこうげきしてきた時に、サファイヤがキングをこうげきしてぼくを守ってくれました。

これからも飼育当番をがんばつて続けていきたいと思ひます。

(講評) 斎藤君が最初は嫌だったのに、動物たちに興味をもち、動物の反応でいろいろ、動物の気持ち想像しながら世話していることがとても優しいですね。雨の日には震えていたチャボを暖めたので、キングも感謝したのでしょうか。次の飼育の子達に、細かいことまで気をつけて、大事にするように伝えてください。きっとチャボたちは、仲良しになれた斎藤君を頼りにしていますよ。

(宮下英雄)